

旧国鉄高島支線 瑞穂橋梁は歴史的資産



船上から見た瑞穂橋梁。道路橋に負けず優美な姿だ

瑞穂橋梁は、品鶴線から分かれて横浜の港を目指す高島線の東高島駅手前からさらに分岐し横浜港の瑞穂埠頭に通じる鉄路に架かる橋梁である。瑞穂埠頭は戦後、アメリカ軍が接収。物資の補給基地として重要な役割を担って来た。かつて港湾への輸送は鉄路が主流だったが、現在は瑞穂橋梁の脇に立派な道路橋が併設され、鉄路の使命は終了。2021年3月、瑞穂橋梁は我が国に返還され、現在は国有財産となっている。現在、老朽化を理由に取り壊しの危機にあると言う。

瑞穂橋梁は、単なる橋梁ではない。1934年(昭和9年)建造で、全長約80m、優美なアーチを描く曲弦ワーレントラス橋と2基のプレートガーター橋を組み合わせた美しい橋梁である。しかも、橋梁技術史上とても重要な位置にある。鉄材の接合には従来のリベット接合だけでなく、当時としては最新の溶接を多く用いている点が特徴である。2種の技術を混用して組み上げた稀な存在であり、接合技術の進化を実証した歴史的橋梁としての評価が高いのである。溶接が十分な強度を保てることを実証し、橋梁ばかりか造船技術の進化にも貢献していること等が公益社団法人の鉄道遺



瑞穂橋梁に通じる築堤の石積み等



陸側から見た全景。美しい橋梁だ



珍しい溶接とリベットの接合部分



瑞穂埠頭側から見た全線。当初から単線だった

「歴史を生きたまちづくり相談室」受付中!! 皆様からのご相談をお待ちしています。
【連絡先】公益社団法人 横浜歴史資産調査会(ヨコハマヘリテージ)内
「歴史を生きたまちづくり相談室」〒231-0012 横浜市中区中區生町3-61 泰生ビル405号室
TEL / FAX : 045-651-1730 E-mail : yh-info@yokohama-heritage.or.jp

旧湘南電気鉄道(現・京浜急行電鉄)瀬戸変電所の調査、保存、活用

京浜急行金沢八景駅に隣接している瀬戸変電所は、昭和5年の湘南電気鉄道開業に合わせ昭和4年に建造された鉄骨、鉄筋、コンクリート造の堅牢な歴史的建造物で昭和50年末まで使用されていた。ここで生まれた電気で湘南デ1形を始め、京浜急行電鉄の1000形他の往年の名車

が快走する電力を供給した由緒ある変電所だ。

当公益社団では、この建物の現況調査等を約5年かけて行った。建物は、取り付け道路の関係で用途に制約があり、事務所が相応しい。それに則し、今年度は現代美術作家の事務所と活動拠点、鉄道関係の資料室等に



瀬戸変電所内を調査するアーティストと関係者

旧モーガン邸(建築家J.Hモーガン自邸)再建募金スタート



焼失を免れた玄関



旧モーガン邸内部の焼損状況

J.Hモーガンは、横浜山手パークホール、111番館、山手聖公会教会堂ほか多くの建物の設計を手掛けた横浜ゆかりの建築家。事務所は横浜市、自邸は国道一号线沿いの藤沢市だった。自邸は、約2,000坪の敷地にスパニッシュスタイルの瀟灑な西洋館だったが、約15年前、2度の不審火で焼損。しかし、玄関廻りは焼け残り、炭化した構造体等により、

かろうじて当時の面影を伝えている。当公益社団では、管理運営にご尽力されてきたNPO法人旧モーガン邸を守る会と藤沢市と力を合わせて再建に向けて募金を開始した。建物は、仮称ヘリテージセンターとして湘南地域と横浜を結ぶ文化交流拠点として再建する計画だ。侯野別邸(横浜市戸塚区)、遊行寺、旧東海道藤沢宿の町並み等との連携活用を目指している。募金は下記のとおりです。皆様のご支援をお待ちいたしております。

寄付のお願い

旧モーガン邸再建のために、みなさまに寄付をお願いいたします。一口から何口でもありがたくお受けいたします。
●個人：5,000円(一口)
●団体・企業等：100,000円(一口)
ご寄付頂いたみなさまのお名前は、再建した建物の室内に掲示させていただきます。
※当公益社団への寄付は、税法上の優遇措置が適用され、所得税(個人の場合)、法人税(法人の場合)の控除が受けられます。詳しくは事務局からご案内します。
●振込先：ゆうちょ銀行 ●口座番号：00270-4-124271
●加入者名：公益社団法人 横浜歴史資産調査会 ※恐縮ですが、旧モーガン邸と明記してください。



訃報 中村 實 監事をご逝去
(元公益財団法人はまぎん産業文化振興財団事務局長)
令和3年(2021)7月14日、86歳。昭和63年(1988)の調査会発足当時から幅広いご見識で、委員として活躍。特に横浜学には造詣が深く、様々な生活文化が息づく横浜を「横浜、よこはま、ヨコハマ、yokohama」と文字でイメージ表現され魅力を広めた。関東学院大学非常勤講師をはじめ東北北化学園大学学部長を歴任。ご冥福をお祈りいたします。



歴史を生きたまちづくり
横濱新聞
Y O K O H A M A
第37号
令和3(2021)年
11月30日発行
Since 1989

宇田川邸 — 大屋根といくつもの小窓がある洋館 —

関東学院大学名誉教授・公益社団法人 横浜歴史資産調査会 理事 関和明

山手には、横浜市が維持管理して保全されている7棟の「山手西洋館」の他にも、所有者の方がそこで暮らしながら保全に協力していただいている洋館がいくつもあります。山手本通りからは少し奥まった場所に建つ宇田川邸は、道路に面した側から見ると切妻型の大きな屋根が架かる三角形の外観が特徴です。この壁面には、六角形や八角形の小窓がいくつもあり、1階には応接室(道路側)と食堂(庭側)に張り出し窓(ベイ・ウィンドウ)が付いています。また、大屋根両側には、棟の向きと直交する方向に、大小の屋根窓(ドーマー・ウィンドウ)があって、2階は屋根部屋のような構成になっています。そして、1階の居間、応接室、食堂には暖炉があります。

この修復工事がなされ、のちに改変されていた箇所はいくつかが創建当時の姿に復元されました。こうしたことは、いま住まわれている方がこの建物を強く愛しているからこそ、可能だったとおもいます。そして、それに代えて、建物を詳しく調査して修復設計をした建築家と、丁寧な施工をした工務店の方の努力の結果でもあります。工事中の現場には、横浜市の担当者と一緒に何度か訪れ、その都度、調査によって新しくわかったこと(例えば壁の色や素材と仕上げ方、オリジナルの開口部の位置や形など)の報告や、施工方法の詳細についての説明を受ける機会がありました。施主、建築家、施工者、そして、この事業をサポートする都市デザイン室のチームワークがあって、このプロジェクトが成就したことをいまま実感しています。

この建物は、明治20(1887)年頃に来日したイギリス人のH.C.Pigott氏(明治40(1907)年没)の夫人である桜井ミツ氏(明治8(1875)年~昭和27(1952)年)によって、大震災直後の大正14(1925)年頃に外国人用の貸家として建てられました。その後、昭和44(1969)年に、現在お住まいの方の父上にあたる方が所有され、現在に至っています。その間、増築や改築の手も加わりましたが、全体としては創建時の姿が良く遺っており、さらに、今回の修復工事によって、元の姿に戻した箇所もあり、1世紀近く住み継がれた住宅として、価値がさらに高まったといえるのではないのでしょうか。建物を保存する最も優れた方法のひとつは、それを愛する住み手(使い手)によって、住み(使い)続けられることである、と強く感じています。

